

# 謹賀新年

令和六年 甲辰

## 銀杏

発行所

〒792-0835  
新居浜市山根町8番1号  
曹洞宗瑞應寺専門僧堂

編集発行 瑞應寺

電話(0897)41-6563  
FAX(0897)40-3127

毎月1日発行  
(振替 01330-2-31918)  
瑞應寺

印刷所 東田印刷株式会社

元正啓祚  
萬物咸新

元旦の風景

佛國山瑞應寺  
住職 金岡 潔宗  
東堂 村上 徳存  
寺選総代 河端 宏一  
住友金属鉱山株式会社  
総務センター長  
地区総代  
一区 三浦 廣志  
三区 大條 雅久  
四区 曾我部英敏  
七区 篠原 元久  
八区 伊藤 数義  
九区 藤田 理  
十区 鴻上紳一郎  
瑞應寺専門僧堂  
堂長 村上 徳存  
堂監 門原 信典  
監事 阿部 信宏  
瑞應寺護持会  
会長 大條 雅久  
学校法人ひかり幼稚園  
同 保護者会



秋の山門

## 瑞應寺住職辞任の挨拶

瑞應寺専門僧堂 堂長 村上 徳存



新春の候となりました。

昨年はコロナ禍後と僧堂改革等で内外共に多事多端の年でありました。檀信徒の皆様におかれましても同様であつたと拝察し、御見舞い申し上げます。

令和六年は辰年で、もっと良い世の中になつてほしいと念願しております。

一昨年は、五月に、先師当山廿九世一光方丈様の廿七回忌と、七月に先住当山三十世通元方丈様の遷化に逢い、昨年七月には一周忌法要があつて、一安堵しておりました。

小衲儀、数年前より内臓疾患に苦しんでおりました処、昨年十一月五日未明、眩暈、吐血・意識朦朧に陥

り、家族に相談して、愛媛

県立今治病院に救急入院いたしました。診断の結果、胃潰瘍、緊急手術の必要あり、当分の入院加療ということで入院加療しております。手術も無事終わりましたが、暫時、加療となりました。

元より、当山は檀信徒が多く、檀信徒の要望には猶予はなく新住職を希望します。交代を決定し、禅譲して退任を決意した次第です。

退董法語

佛国禅窓樹影長

(佛国禅窓、樹影長し)

行雲流水仰慈光

(行雲流水は慈光仰ぐ)

唯看開閉只如是

(唯だ看る、開閉は、只だ如是)

夢幻空華游十方

(夢幻空華は十方に遊ぶ)

珍重

(ちんちよう、御気嫌よう)

という法語を作ってみました。住職としては、多くの檀信徒を持つているので、多忙をかかえて苦勞しましたが、解放され、十方に自由を得たということでしょう。

幸いに、新住職には金岡潔宗師を、後堂准師家に門原信典師を、僧堂監事に阿部信宏師が就任、僧堂衆中准師家候補が二・三名、雲衲衆も四・五名掛搭しております。

今冬安居は、尾道市因島長福寺徒飯島慈皓兄が首座として就任、結冬安居が行われております。

小衲儀、昭和三十五年八月二十八日に、先師一光方丈様の得度を受けて以来

六十三年、瑞應寺徒弟として出家生活を実践、駒澤大学に入学、当時の沢木老師の破格の参禅を行じ、学業は横井先生に五位に参入し、その後、約五年間永平寺特別僧堂に参禅し、当時の永平寺僧堂の熊沢貫首禅師、佐藤貫首禅師に参禅し修了。

瑞應寺に帰堂して、先師一光方丈の補佐をした。  
“それで佛国禅窓樹影長し”と“行雲流水慈光を仰いで”修行をさせていただいて長年月を過ごしました。

その後、

今治市円久寺住職十年。

伯方町禅興寺住職二十年間就任。

平成十三年、瑞應寺僧堂・堂監・准師家就任。

平成二十六年、師家就任。

平成二十八年、堂長就任。

平成三十一年、瑞應寺住職に就任。

その間、檀信徒の皆様、道友諸師、瑞雲会会員の皆様より御道愛・御導教をいただきましたことを深謝にたえません。

退任に当り感謝致します。一言謝意を申し述べます。

最後になりましたが、当山鎮守金毘羅大権現・弁財尊天・護法諸天善神の神護・擁護を深謝。各師、正法興隆・檀信帰崇・諸縁吉祥ならんことを祈念致します。  
此上共加療し残生を全ういたしたいと念願します。

## 新任の御挨拶

瑞應寺住職 金岡 潔宗  
かなおか けつしゅう



新年明けましておめでとうございます。

新春を迎え皆様方におかれましては、益々御清栄の段、大慶に存じます。

さて、このたび当山三十一世村上徳存老大宗師退任に伴い、諸般の手續きを経て、令和五年十一月七日付けにて瑞應寺住職を拝命致しました。もとよりこの瑞應寺を継ぐ力量の無きことは十分承知しておりますが、法類の方々、総代の方々、有縁の方々の温情を賜り、自らの浅学菲才を顧みず、お受けした次第でございます。

私は、昭和三十六年飛騨高山で生まれ、地元の高校を卒業し愛知学院大学（曹

洞宗の大学）を出て曹洞宗の本部に勤めましたが、檜崎一光老師の下で修行がしたいと、今から約三〇年前の平成二年三月に瑞應寺専門僧堂に修行に來ました。その後、檜崎通元方丈さんの弟子となり、平成八年より大洲市の通元方丈さんのおられた溪寿寺を継ぎながら瑞應寺のお手伝いをしていただき現在に至っております。

「鶴飛千尺雪 龍起一潭水」という禅語があります。鶴は飛ぶ千尺の雪、龍は起つ一潭の水と呼びますが、鶴は積もった雪を力強く蹴り大空へと飛び立ち、龍は凍った水面をもとせず空に昇る。鶴も龍もどのような困

難をも突き破って、自分に備わった力を発揮し挑戦するという意味です。

また僧堂の入口の聯には「修行三祇劫 功滿つるも休ず 取證一刹那 染汚する事は得じ」（永平広録卷二）と書かれています。

三祇劫とは、四十里四方の岩を百年に一度天女が舞い降りて羽衣で、その岩を一度払い岩が摩滅してなくなっても、なお「二劫」の間は終わらないと云われていますので、極めて長い長い宇宙的な時間をいい、その宇宙的な時間を修行し、その成果が十分に満ち足りても、修行はなおとどまらないと、いうのです。そしてその修行は、取證

一刹那だと。この一刹那が大事だということです。少しでもその気になって真剣に行ずる。そうすることでそれは決して小さくないと、いうのです。

師僧檜崎通元東堂老師は、瑞應寺住職を拝命したときに「わしは一人になつてもこの瑞應寺を、僧堂を続けていくんじゃ」とおっしゃっていました。

そして、一昨年の五月二十六日に入院された際に、手を握ると精一杯の力で握り返され「瑞應寺をお願いします」と声を絞り出すようにおっしゃった言葉が脳裏に焼き付いております。

その言葉を肝に銘じ、今の私にできる唯一のことは、一つ一つ真剣に行じ、力を出し切ることです。

御開山様初め歴代住職に恥じないよう精進を誓い寺門繁栄と檀信徒の教化に

努力いたす所存でございます。

何卒皆様方のご指導ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

新任にあたつて大変失礼ではございますが、書面にてご挨拶とさせていただきます。

末筆ながら皆様方のご多幸を心からお祈り申し上げます。

合掌



## 観無常心

後堂 門原 信典



本年も皆様の身心ご安寧と世界平和を切にお祈り申し上げます。

新年を迎え、また馬齢を重ねています。振り返れば慚愧を知るばかり、身心の衰えは自覚しても、老いたとは思えないのか、思いたくないのか、いただくのものと諦観しています。しかし確実に毎日毎日寿命は減っているのです。

一休禪師が「正月は冥土の旅の一里塚、めでたくもありめでたくもなし」と新年早々に「油断めさるな、油断めさるな」と頭蓋骨を持ち街中を歩いたと逸話にあります。

五年前に中国の武漢で突然発生した新型コロナウイルスで世界中が右往左往、天地がひっくり返るが如く大騒ぎとなりました。幸いに私も自坊の家族も無事でしたが未だに油断はできません。世の中の価値観、人々の生き方がこれで変わるかと少しは期待しては見まし

たが、人が動かなければ経済が成り立たぬと、どこも人集めに知恵を絞る、のど元過ぎれば享楽を追い求め、火に油を注ぐが如く経済優先享楽優先に拍車がかかります。

しかし、毎年発生する自然災害、未だに続く戦争、理不尽な事件事故等、世界情勢もこの私の人生も無常変滅は普遍です。

どうせ「一寸先は闇」だから今を楽しく利那的に生きるか、「二寸の光陰軽んずべからず」と菩提心を起こして道を求めるか分かれ目です。朝参で拝読する大智禪師の「假名法語」には「菩提心とは、観無常の心これなり。凡そ天地のあいだに生をうけて陰陽の氣をうくる者、ついに無常変滅に帰せずということなし。無常の殺鬼の人をうかがうこと時として、その時ならずということなし」とあります。

「信仰心とは何か」祖先を敬い偲ぶ事も、万福多幸を祈る事

も大切です。佛道修行に於いても、そこに「菩提心」つまり「無常を觀する心」を忘れてはいけないと大智禪師は説かれます

『經に曰くこの日すでに過ぎぬれば命も亦随つて滅ず、少水の魚の如し、是に何の樂しみか有らん』これは梵網經の中のお示しです。「少水の魚」とは僅かな水の中に棲んでいる魚の意

から、死が目前に迫っていることとの譬えです。三匹の魚が大きな波に打ち上げられ浜辺の水溜まりに運ばれてしまった。

「さてどうするか、このままでは死んでしまふ」と三匹の魚は自分達の行く末を案じます。一匹は、勇気を奮い起こして思いつきり跳ね上がり海に戻ります。次の一匹も、さてどうしようかと、元氣は無かったが、ゆっくり這いながらも何とか努力して海に戻ります。最後の

うけを決め込んでいたら捕まってしまう。海は仏法の大海、魚は私達修行者です。一匹目の魚のように、「大強精進勇猛佛」の如く「他はこれ吾にあらず」「さらに何れの時を待たん」自分には今しかない、と、やる気を出してこの身心を賭して佛道に入るか、二匹目のように、迷いながらも導かれて佛道修行を志すか、三匹目のうちに、このまま時を待てばそのうちに又良いこともあるだろうとあきらめてしまふか。

「無常の殺鬼」という真実が片時も離れず私達にこの選択を迫っているのです。

瞬間瞬間が冥土の旅の一里塚。『衆等各々勤め精進して頭然を救うが如くすべし、ただ無常を念じて慎んで放逸なることなかれ』そして佛道修行者に呼びかけられます。頭然とは、頭に火がついて燃えている。ポヤッとせずには何か何でもすぐに消さなければ命も危ない。今は忙しくて坐禅なんか出来んからマアそのうちにといい訳をして、自分自身を甘やかしていたら忽ち無常の殺鬼に襲われて命を失ってしまうぞ。「精はすなわち雑らざるなり、進はすなわち退か

ざるなり」です。そうは言ってもこの身体は思うようには行かぬ、どう老いるか。通元老師は、常々信仰者の在り方として「今日が最後と思って勤めなさい」とお示しでした。今日が人生の最後ならばどう生きるか。法句經を読んでいたら、次のお示しがありました。

『誠意と徳があり、慈しみと慎みを持ち、人を傷つけず、自らを調え制して、汚れをすつかり吐き出した人。彼こそ『長老』とよばれる』言葉は易しいが、厳しいお示しです。身心を調えなければ至難の事です。しかし、今となつてはこの「長老」に導かれ二匹目の魚の如く這いつくばりながらも、み佛様に付き添っていた

だき、一日一日を次の言葉の如く歩むしかあるまい。と自分自身に誓願しております。

『世はいかにありとも人はいかにありとも愚かしきことのいかに多く我を悩ますともまことの道ひとすじに守りて迷わず臆せず佛陀と共に我強く生き抜かん』

本年も共に坐禅のご縁がいただけますよう。 合掌

## 年頭所感

四十年前、檜崎一光老師にお尋ねしました。「お釈迦さまが多くの方から慕われましたのは、その教えが素晴らしかったからでしょうか。」

「もちろん、それもあるだろうが、教えが説かれる前に、もう慕われていたのだよ。そのお姿から滲み出てくるものに触れて、信ずる心をおこしていた。修行をするというのは、こういうことでなければならん。教えが身体から滲み出てくるような修行をせんならん。特別な修行などありはせんのだ。日常の生活の中にある。」

檜崎通元老師の、「叢林が基本だ」というお言葉を念じながら本年も精進致します。

講師 越海暢芳

## 甲辰新年

旭上東天歳近辰

眼眩世事変遷頻

叢林正好随規行

今昔円通祖道親

元日の東の空に旭日が昇り、

甲辰の新年を迎えました。

昨今の世相の変遷は目まぐるしく、終わりの見えない戦争は、単なる軍事衝突に非ず、関係各国の政治的思惑や経済的利権も絡み、事情の複雑さと醜悪さを増しているように感じます。人工知能や自動運転等の技術開発も急速に進み、先進国の暮らしは便利になりますが、軍事技術の延長線上にあることを思えば、その取り扱いには知恵と協議が不可欠であり、不殺生の誓いや願いが欠ければ、この世界は地獄と化するものと危惧します。

幸いに叢林（修行道場）には規範があり、昔も今も同じように鐘が鳴り、読経の声が響きます。世事から離れた安全地帯での無責任な修行ではなく、世間にあっても容易く流されない、仏法の芯をしつかり立てる修行です。先輩方が踏まれてきた道を疑わず歩き、さらに先へと続くよう信じて勤めてまいります。

監事 阿部信宏

「衆生無辺誓願度」衆生かぎりなきによりて誓願して度さん  
「煩惱無尽誓願断」煩惱かぎりなきによりて誓願して断ちなん  
「法門無量誓願学」法門かぎりなきによりて誓願して学ばん

「仏道無上誓願成」仏道かぎりなきによりて誓願して成しとげん  
仏教者としてのお誓い「四弘誓願文」です。まず最初に教えられ毎日お唱えし実践していく言葉です。  
人数の少なくなった今、何役も兼務しながらすぐに回ってくる当番を勤めていく雲水さんの姿があります。お坊さんの修行をするぞと上山を決意して、木版を境内に響かせ始まった修行生活。肉体的にも精神的にも大変な中、その気持ちを保ち続けているその姿にしみじみと誓願の尊さを感じます。

あらためてこの語句をかみ締めて、雲水さんと共にこの一年もかぎりなき誓願とともに勤めてまいります。

知客 家古谷光祥

「諸仁者かえつて古人の偈をみるや（山田脱粟の飯、野菜淡黄の羹、喫せばすなわち君が喫するに従ず、喫せざれば東西するに任す。）伏して惟んみれば同道、各自に努力せよ。珍重。」

年頭の所感と言いつつ、十二

月の初旬、臘八摂心中に思案していたりする。この言葉はその摂心の、夕方のお勤めでお唱えするお経の一節です。

これまで瑞應寺専門僧堂で色々な配役を務めさせて頂き

ましたが、どの配役でも雲水さん方と一緒に僧堂の行持を勤めさせて頂くのがその役でした。僧堂では「大衆一如」「自己をわするるなり」と言い習わされているので、ついつい雲水さん方と一緒に修行していればそれだけで充分だろうと思ってしまうがちです。しかしながらこの頃、それだけでは少し淡々とし過ぎていると思うようにもなり、本年は心機一転し大衆一如の行持にあつて、自身の修行の歩みを進めていきたい所存です。

維那 吉松聖博

新年明けましておめでとう  
ございます。

この新年が皆様にとりまして良き年でありますことを心より祈念しております。

様々なことを抱えていますと、中々他事無くとはいかない。今一度、喫茶喫飯（茶に逢うては茶を喫し、飯に逢うては飯を喫す）只管に一つ一つ、勤めていきたいと思えます。

副典 足立光顕

新年あけましておめでとう  
ございます。旧年中はいろいろとお世話になり、ありがと

うございました。昨年十一月には堂長老師が体調を崩されました。これまで大病も入院もなかったために大変驚きました。あらためて、あたりまえの日常があたりまえでないことを思い知りました。日々の日常に感謝し精進して参りたい所存です。

侍者 村上徳樹

本年も何卒よろしくお願い致します。

十年以上も前、雲水だったころ、短い期間重なつて安居していた方と、近年たまたま再会する機会があつた。別の道場でも更にしっかりと安居をされ、立派になられていた。

毎年、様々な人が瑞應寺へ上山し、長く居られる人もいれば、短い期間しか居られない人もいます。

互いに三業不善なれば色々なトラブルもあるが、それらをまた成長の糧に、と私の方が励ましていただいている。縁あつて上山された方々が少しでも良き安居になるよう、これから精進していきたい。

副悦 古川承久

明けましておめでとう  
ございます。

「昨年(こぞ)は五十歳を迎え、「天命(てんめい)を知る」ということはをもって、自分の人生の意味を表現しましたが、またもう一年という区切りを付けることになりました。」

樹木は一年一年成長することによって年輪を増やしていき、また春に出てくる竹の子も成長するにあたり節目を付けながら伸びていきます。これは我々人間世界も同じだと思います。出家し仏道を目指す修行者ならなおさらのことでしょう。仏教では菩薩(ぼつさく)が仏果(ぶつが)に至るまでの修行の段階を詳しく分けて説明する教えもあります。仏門に入った者として今自分はどの位にいるのか、明確に検証するのが新年を迎える(一年一年の節目を付ける)所以(ゆゑ)ではないでしょうか。

今の自分の位がはつきりに分かれれば、ゴールに向けて計画を立てたり、前に一歩踏み出したりすることが出来ます。そして何れかは仏果に到(いた)ることもできるでしょう。

「信・解・行・証」という教え(四法)があります。すなわち教えを信じ、教えを理解し、教えによる実践を行い、修行によって証(果)を得るということです。また、これは常に同時に行わなければならないことで、そこに仏教の本質があるとも言えます。

す。道元禪師もこの考え方を「修証(しゆしやう)一等(いとう)如(に)よ」ということばで表現したと思われます。

これからも光陰(こういん)虚しく過(すご)すことなく、一年一年精進して行きます。

蔵司 金 範松

『何故に家を出でしと折りふしは心に愧ぢよ墨染の袖』  
僧堂で修行していると、雲水さんの努力する姿に日々励まされます。

また、雲水さんの成長の早さにも驚かされます。

上山の時はお袈裟すら着けられなかった新到さんが、半年もすると、僧侶としての日々の公務や行持の配役も、立派にこなせるようになります。

一方、修行に身を投じてからちょうど一〇年。まだまだできないことがたくさんあるのに、ごまかし、逃げ、守りに入ろうとする気持ちが年々大きくなっているように感じます。十一年目の今年、今一度初心に立ち返り、修行に励んで参ります。

知殿 三宅俊尚

人類は有史以来様々な困難と不安に直面し、それを乗り越えて生きてきました。それ

があつて、今私たちは新しい年を迎えることが出来ます。

しかし、人々の悲しみ苦悩は終わることはありません。その中であつて私たちは一体どう生きて行けばよいのでしょうか。

臨済宗中興の祖、白隠(はくいん)禪師のお示しの中に「君看(きみみ)よ双眼(そうがん)の色、語らざるは愁(うれ)い無きに似たり」という言葉があります。

人は悲しみや苦悩が深ければ深いほど、言葉にしないのです。語らないのです。それを只黙(ただもく)つて受け止めているからこそ、静かに澄んだ眼をさ

れているのです。愁(うれ)いが無いわけではありません。私はそのような深い悲しみ苦しみを知っている人こそ誰よりも他の人の心もわかり、優しく出来るのではないかと思つて

います。そしてその透き通った眼の底にある悲しみ苦しみを少しでも理解し、寄り添い、共に仏道修行に励む事が、仏弟子としての生き方と信じ一年の誓願とします。

直録 楠本剛大

## 大衆年頭所感

瑞應寺に安居をして半年、修行不足を痛感する毎日だが、同時に

今の生活にもすっかり慣れた様にも思う。修行が日常になった事を誇りに思う。一方、生活への慣れが懈怠(かいだい)の心を起す様になった。

そんな怠けた日々を過ごすうちに、新到和尚さんが秋に上山してきた。彼らを見てみると、毎日必死に頑張っていた自分の新到の日々を思い出し、初心の尊さ、美しさに気付かされた。

謹賀新年、初心に立ち返り、改めて修行に励もうと思う

首座 慈皓

謹んで新年のお慶びを申し上げます。

入堂から十ヶ月程の歳月が経過し、夏制中の首座に就いて、今制中には書記という大役を頂戴致しました。初めて迎える瑞應寺の冬。散りゆく大銀杏の一片(ひとひら)が少しずつ境内を黄色く染めていくのときを同じくして、我々雲水も濃密な修行の一日一日を重ねて参りました。

苦楽を共にした安居者や現在の大衆・役寮様方との有り難き出会いの御縁に感謝を申し上げますと共に、「日々是好日」「歩々は道場」として日々の中散りばめられた仏様の教えという葉を一枚ずつ丁寧に根気強く拾い集め続けていけるような充実した一年

を過ごしていきたいと思ひます。

書記 義晃

「我が辦道の中に名利の念あり」

瑞應寺に入堂して七ヶ月、自分の中にある矛盾に気がつきました。仏道を学ぶという事は、名利の念を放下するという事。しかし、その名利に対する執着心が七ヶ月の間、自分を突き動かしていた事もまた事実。そんな自分の悩みに対し、このような言葉をいただきました。

「今はただひたすらに修行せよ。冬に咲く花もある。だが、それに気づくこともまた大事な事だ。」

自分にとつての冬はいつなのか。果たして花は咲くのだろうか。未だ自分の中に疑問はあります。しかし、今はただひたすらに、後目を待たず、今日今時を過ごし日々時々を勤める。この事を自分にとつての新年ならびに仏道修行の抱負とし精進していききたいと思ひます。

副堂 太一

新年あけましておめでとうございいます。

入堂して八ヶ月が経ちました。新到和尚さんが入堂されて、教わる立場だったのが教える立場になり、正確に相手に伝わって

いるのか、お手本となるような行動をしているのか、毎日悩みながら過ごしています。また、安居一年目ということもあり、初めて経験することや、失敗することとたくさんあります。ですが、精一杯何事にも取り組んでいきたいと思っています。

副堂 多聞

入堂して早二ヶ月経ちました。今まで一般社会で過ごしてきましたが、これからは仏道を学んでいく身として、今までとらわれていた気持ちを取り払い、役寮さん、古参和尚さんの方々の指導に従って修行に励んでいきたいと思っています。そのためには、一つ一つの所作、姿勢、言動を聞いて、目で見、実際にやってみながら日々精進してまいります。ご迷惑をお掛けすると思いますが、本年もよろしくお願ひします。

辦事 陸生

瑞應寺に入堂が許されて確か三日目のことだったと思います。作務の時間中に僧堂前のすのこを猛ダッシュで水拭きしていた時のことです。「植物は誰一人頑張っただけじゃないよ。皆んなただ季節に身を任せているだけ」



という、恐らくは参拝のお客様らしき方の声が聞こえました。心と体を痛めつける苦の修行しか知らなかった私にとって、何か熱いものがこみ上げて来ると同時に、解き放たれた気がして「もう一度ここで地に足を付けてしっかりと修行してみよう」と意を固めた時間でした。

鐘司 聖人

## テレホン法話 〇八九七四一〇〇三三 禪のたより



### ◆ものの見方

私が住職するお寺は、瀬戸内海の島にあります。小さな島なので、海と山がとても近く、コンパクトな自然環境の中での暮らしです。

近所に銀行の社宅があり、赴任されてきた銀行員の方々が住みます。そこのお一人、Yさんはスポーツマンの青年で、毎朝5km前後のランニングを欠かさず、走行距離とタイムとともに、早朝の島の美しい風景写真をSNSにアップされています。「この時間帯は、このスポットが最高ですよ」と、島で生まれ育った我々が見落としがちな視点を、常々教えてくれています。

師走八日はお釈迦さまがお悟りを開かれた日として伝わります。その日の明け方、坐禅のお姿のまま明星をご覧になり悟られ、「我と大地有情、同時成道」と言われたといいます。このお悟りが、お釈迦さまご生涯の布教の基となった

のですから、仏教にとつて最重要の出来事と言えます。

お釈迦さまのお悟りの眼を通して世界は、全ての存在はご縁の働きにより、ボトムアップ型の関わりで構築されており、さらに諸行無常というサイクルする機能により動き続けている、このようにご覧になったのではないかと想像します。ただ、その世界はお釈迦さまのお悟りによる出現ではなく、ありのままの世界が、お釈迦さまの坐禅修行と見明星をきっかけとして開かれたお悟りの眼に映った、という出来事でした。

先の「我と大地有情、同時成道」のお言葉は、私なりの解釈として、「我見が抜け落ちた時、目の前に悟りの世界が広がった」と、いただいています。「我見」のフィルターを透ることにより生じる、人それぞれの是非分別や無関心は、この娑婆世界に起こる諸々のトラブルの根源となりますが、即時の自覚がしにくいため、点検と

修行の繰り返しです。

改めて、冒頭のY青年の視点の話ですが、私にとつて見慣れた風景は、見ているように見えていないに等しく、修行に置き換えると、している態度実はボーっとしている状態といえ、反省したことです。

瑞應寺 専門僧堂監事 阿部信宏

令和五年十二月一日〜十日



聖護寺大祭



臘八摂心

■ 釈尊成道の聖日を因み、十二月一日(金)より八日(金) 暁天まで、恒例の臘八摂心を修行。会中は、門原後堂(従容録 金岡監録(正法眼蔵自証三昧 越海講師(修証義第五節・六節)(修証義の成り立ち) 吉松維那(伝光録)の提唱を拝聴。会中の供養施主に深謝。

令和五年臘八摂心

供養施主(順不同)

当 山 総代会 殿  
新居浜 市 藤田理 殿  
四国中央 市 正覺寺 殿  
香川 県 南隆寺 殿  
愛知 県 宝泉寺 殿  
愛知 県 森川法雲 殿  
松山 市 義安寺 殿  
岡山 県 東林寺 殿  
今治 市 禅興寺 殿  
岡山 県 中興寺 殿  
広島 県 長福寺 殿  
鳥取 県 玉泉寺 殿  
当 山 梅花講 殿



成道会

成道会・断臂摂心

■ 十二月八日(金) 臘八摂心大開静、堂内朝課に引き続き成道会献粥諷経、小参(門原後堂)行鉢は乳粥謹喫。午前、成道会正當諷経。当山梅花講員による詠讃歌の中、出班焼香を厳修。

数頂戴。

兵庫 清陰寺 殿  
西条 市 田中淑恵 殿  
宮城 県 法雲寺 殿  
広島 県 東光寺 殿  
広島 県 雲松寺 殿  
広島 県 少林寺 殿  
島根 県 豊龍寺 殿  
当 山 堂長老師 殿  
他、野菜、果物、菓子等多



成道会 ひかり幼稚園お参り



小参

九日(土)、震旦二祖慧可大師断臂報恩の一夜摂心。翌朝四時覚眠、暁天只管打坐。続いて二祖忌献粥諷経、二祖忌正當諷経を厳修。

十二月の日鑑

一日 祝祷  
臘八摂心(八日迄)  
三日 日曜参禅会  
八日 成道会  
九日 断臂摂心(十日迄)  
十日 震旦二祖忌  
十三日 ヘルモニ一同慰霊祭  
十五日 祝祷・略布薩  
十八日 観音講・勉強会  
廿九日 餅つき  
廿一日 略布薩・除夜

一月の予定

一日 大般若祝祷諷経  
歳朝人事・年賀ノ拝  
二日 角野消防団初祈禱  
三日 寿餅ノ拝  
五日 年頭総代会  
七日 おねはん受付開始  
日曜参禅会  
十五日 祝祷・略布薩  
法戦式  
十八日 観音講・勉強会  
十九日 寒行托鉢(廿日迄)  
廿一日 略布薩

银杏感謝録

愛媛県 梶原恵都子 殿  
山口県 久屋寺 殿  
愛媛県 正福寺 殿  
愛媛県 祥雲寺 殿  
千葉県 高垣睦城 殿  
愛媛県 實法寺 殿  
大分県 長松寺 殿  
長崎県 宝泉寺 殿  
長野県 龍洞院 殿  
北海道 田崎正倫 殿  
岡山県 威徳寺 殿  
兵庫県 正入寺 殿

(令和五年八月二十日受付迄)



鐘声

冬制中は摂心、坐禅に集中する期間が長い、坐禅の為の修行期間である様に思います。

以前鐘声に「坐禅には「音」がある」と恥ずかしくも書いたのですが、最近では、坐禅にはそうした音の中に隠れて聞くことの出来ない「声」もまたあるのだと考える様になりました。それはつまり仏性、自分の心の奥底に眠る御仏の声の事であります。

私はこの「坐禅の声」を聞くことの出来る日は来るのでしょうか。坐禅に見返りを求めているのは難しいことだと思いつつ、この冬の坐禅を通して見極めて行きたいと思っています。

今冬首座